



episode.08

石が暮らしをつくる！ ～マチュ・ピチュ大当～

話し手 大当自治会長
ながやま しんや
永山 伸也さん (昭和33年10月13日)

聞き手 希望が丘学園 鳳凰高等学校 2年
神田 しおり 泊 聖依

「大当に宿る神と仏」

私は普段、大当(おおとう)の自治会長をしているんです。ここの魅力を伝えたいし、思っています。ここは神様や仏様なんかとゆかりが深くです。大当の中心に「たいごら」という小川が流れるんですが、そこを境に呼び方があるんです。たいごらの東側を「かんむっ」、西側を「にいむっ」といいます。「かんむっ」つうのは、神向き。野間神社の「神様」を向いている方角ということで「かんむっ」ですね。「にいむっ」は仏教が渡ってきた方角。西を向くとお釈迦様が生まれた天竺がありますね。ということで、西というのは「仏様」。そういうこともあって、この辺では「神」とか「西」がつく名字が多いですね。

それから、この辺は石垣が有名ですが、石垣だけじゃなくて、御神体も石なんです。川原とかの石ではなく、海底から持ってきた石。江戸時代ごろに、綿で包まれて、大事に運ばれてきたそうです。昔から、神様や仏様に感謝しながら、石と共栄共存しながら暮らしてきたのがここ「大当」なんですね。

「風土が生む石垣と生活」

大当の昔の人達は、なぜこんな斜面に石垣を築いたのかというと、平地が少ないから斜面に基礎を作ったんです。例えば、家を建てるために石垣で基礎を組んであります。全部の家が石垣の上でできていますし、ほとんどの家の後ろが石垣になっています。今だったらコンクリートですが、その時はコンクリートもない時代で、石を積んで頑丈にしていました。石の積み方は、わざわざ大きい石を上の方に持ってくることで、小さい石を大きい石で押して頑丈にしているんですよ。なんで石を材料に使ったのかというと、この辺は掘れば掘るほど石が出てくるからなんです。それを集めて、住宅地や畑の基礎に使ったんですね。山を整地する間も出てきた石を積んでたんだと思います。

大当は海のすぐ側だけど、石垣のおかげで斜面の上にも畑や田んぼがあります。それもあって、昔は半農半漁に精を出して、田んぼや畑を作り、そして海に行って魚をとって、この地区だけで生活ができたんです。冬場は北西の風が大変ですが、北西には山があって防いでくれます。それも考えてここに集落を築いたんじゃないかな。

この辺は地震が少ないのもありがたいね。石垣が崩れるほどの地震はないから、今でもこの風景が何百年も保たれているんですよ。地形や環境が、今の大当の風景を作っているんです。



「大当石垣の里を守りゆく姿」

この風景を守るためにも、まずは集落維持ですが、それが一番大変です。

僕も最初は「仕方ない。知ったこっかよ」って、石垣がこんなにすごい、思ってたんですけど。石垣を守る活動をやり出してから「昔の人達はすごいことをやったんだな。」と、この石垣の風景を守ろうという思いが芽生えてきましたね。

僕はここを、「日本のマチュ・ピチュ大当」ちゅう、目玉にしたいと思ったりします。目玉を作ったらそれを見に人が来るし、いろんな観光にも繋がると思っていますから。スタンプラリーとかやったら面白いと思いますよ。小さなことでも続けてやったら、いつか「ないごっかあの大当は！」って思われる日が来ると思ってやっています。

口じゃなくて、歩いてもらって、見てもらって石垣の凄さを感じてもらいたいですね。



聞き書きコラム

歴史ロマン “大当石垣群の里”

南さつま市笠沙町片浦にある「大当石垣群の里」は、自然石を野面積みにしてできた集落。

石の数は百万個とも言われ、その景色は圧巻。歴史的資料は大正12年の大火により消失しているが、明治頃に集落の畑から、宝塔の一部が発見された。宝塔は、平安時代から江戸時代に多く作られたことから、地元では「石垣の起源は、平安・鎌倉時代からではないか」と言われている。